

ドイツ語に於ける衝突・遭遇の動詞の完了助動詞選択

藤井俊吾

s.fujii0404@gmail.com

キーワード： ドイツ語 完了助動詞選択 意味役割 TELIC ENTITY

要旨

多くのゲルマン語派に属する言語と同じく、ドイツ語は完了助動詞選択という現象を有している。この現象は長年議論されてきた問題ではあるが、依然としてコンピュータ動詞や衝突を表わす動詞、停留を表わす動詞といった「例外的な動詞」を抱えている。本稿では、「例外的な動詞」の中でも衝突を表わす動詞に焦点を当て、Ackerman & Moore (1999)で提案された TELIC ENTITY の概念を採用した上で、これらの動詞の振る舞いの原理を明らかにする。

1. ドイツ語に於ける完了助動詞選択

フランス語やオランダ語などといった他の多くの印欧語と同様に、ドイツ語には完了形を構成する際 haben と sein (英語に於ける have と be) という二つの完了助動詞を選択する現象が存在する。以下はそれぞれの助動詞を選択する telefonieren (h)¹「電話する」、gehen (s)「行く」、brechen (s)「壊れる」の例文である。

- (1) Hans hat mit Rita telefoniert.
Hans.NOM have.PRS with Rita.DAT phone.PP
ハンスはリタと電話した。
- (2) a. Rita ist nach Hause gegangen.
Rita.NOM be.PRS to house.DAT go.PP
リタは帰宅した。
- b. Die Vase ist gebrochen.
the.NOM vase.NOM be.PRS break.PP

本稿を執筆するに当たり、指導教官の西村義樹教授から丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。またご厚意から本稿の基になった論文をご指導下さった東京大学英語英米文学研究室の渡邊明教授、例文の確認や深い示唆に富むご指摘を下さったケビン・ペルガーさん、研究会にて本稿の方針を決定づけるご指摘を下さった石塚政行さんと長谷川明香さん、日頃から多大な知識と示唆を下さっている言語学研究室の方々に深く感謝致します。¹ 本稿ではある動詞について言及する際、その動詞が自動詞用法に於いて基本的に haben のみを取り得る場合は(h)と、sein のみ取り得る場合を(s)と、haben と sein 双方を取り得る場合には(h,s)と標示する。尚、ここで言う自動詞用法とは前置詞句を伴う場合を含む。

花瓶が壊れた。

語学の教科書などに於ける一般的な説明として、大部分の動詞は *haben* を完了助動詞に取り、*sein* を完了助動詞に選択するのは移動や状態変化を表わす一部の自動詞のみと説明される。

表 1. 完了助動詞選択の伝統的記述

他動詞	再帰動詞 ²	自動詞
haben		haben or sein

しかし、例外的に *sein* を完了助動詞に選択する動詞として、場所移動や状態変化を表わさない *begegnen* (s)「出会う」、*bleiben* (s)「留まる」や *sein* (s)「～である」、また対格目的語を取る *eingehen* (s)「(契約関係に)入る」などが存在することから、完了助動詞選択は長年議論が続いているにもかかわらず未だに説明的に妥当な基準が策定されていない難しい現象である。

本稿では完了助動詞選択に於ける例外として扱われることの多い動詞から *begegnen* (s)「出会う」などの二つの参与者同士の接近・衝突による相互作用を伴う動詞群を「衝突・遭遇の動詞」としてまとめ、それらが *sein* を完了助動詞に選択する原理を考察することを目的とする。

尚、本稿で挙げる例文については、特に断りが無い限り、辞書の例文ないし辞書を基にした作例である。またウィーン出身の 20 代男性のドイツ語母語話者のインフォーマントに例文の確認を頂いた。

2. 先行研究

先行研究では統語論や意味論など様々な視点から提案が為されたが、例えば統語論の視点では非対格仮説による説明を Grewendorf (1989)が行った。ドイツ語に於いては、基底に於いて主語が目的語の位置にある非対格動詞は非人称受身を構成出来ず、且つ *sein* を完了助動詞に選択するとしたが、Kaufmann (1995) や Sorace (2003)によって指摘されている様に、非対格動詞であるかを定める判定基準は必ずしも一致しない為に、これを基準として用いるのは妥当ではないと考えられる。以下の例文(3b)及び(4b)は *sein* を完了助動詞に選択する *ausreißen*「逃亡する、ちぎれる」及び *gehen* (s)「行く」の非人称受身文である(例文 3 は Kaufmann 1995:396 より引用)。

- (3) a. Das Kind {*/hat/ ist} ausgerissen.
 the.NOM child.NOM {*/have.PRS/ be.PRS} run.away.PP
 子供は逃げた。
- b. Aus diesem Heim wird häufig ausgerissen.
 from this.DAT house.DAT become.PRS often run.away.PP

² ドイツ語に於ける再帰動詞とは再帰代名詞を目的語に取る動詞のことである。

この家からはしばしば人が逃げている。

- (4) a. Alle { *haben/ sind } zu Tisch gegangen.
 everyone.NOM { *have.PRS/ be.PRS } to table.DAT go.PP
 皆が食卓に着いた。
- b. Es wurde zu Tisch gegangen.
 it.NOM become.PST to table.DAT go.PP
 皆が食卓に着いた。

意味論に基づく完了助動詞選択に関する説明としては、例えば Diedrichsen (2002) はドイツ語では当該の動詞が場所移動、状態変化及び出現・消失を意味する場合に完了助動詞に *sein* を選択するとした。またオランダ語に於ける議論としては、Lieber & Baayen (1997) が³ conceptual structure (CS) 「概念構造」の段階に於ける ‘inferable eventual position or state’ (IEPS) 「推論可能な位置ないし状態結果」という素性を完了助動詞選択の基準とする提案を行った。動詞が [+IEPS] となれば *zijn*(=be) を、[-IEPS] となれば *hebben*(=have) を完了助動詞に選択し、それぞれの動詞は [+IEPS] のみを取るもの、[-IEPS] のみを取るもの、[+IEPS] と [-IEPS] の両者を取り得るものの三つに大別される。しかし、冒頭でも触れた通り、これらの議論に於いては *bleiben* (s) 「留まる」や *begegnen* (s) 「出会う」などといった、場所移動や状態変化を表わさない「例外的な」動詞を想定しなければいけないことから、助動詞選択の基準としては問題を残す結果となっている。

ところで意味役割を基準に用いる立場として、Zaenen (1993) は Patient properties が Agent properties を上回って -r (unrestricted) の指定³を受けた参加者が主語として実現した時、オランダ語では完了助動詞に *zijn*(=be) を選択するとする提案を行った。Agent properties 及び Patient properties⁴ とは Dowty (1988) が提案した、恣意的に設定されうる（或いは幾通りにも解釈されうる）意味役割を包括的に捉える為の概念である。概要は以下の様になる。

- (5) Agent properties: a. volition/ b. sentience (and/or) perception/ c. causes event/ d. movement/ e. referent exists independent of action of the verb
- (6) Patient properties: a. change of state⁵/ b. incremental theme/ c. causally affected by the event/ d. stationary (relative to movement of proto-agent)/ e. referent may not exist

³ -r とは Government and Binding Theory (GB) に於ける内項、及び Relational Grammar (RG) に於ける initial object に該当する Lexical Functional Grammar (LFG) の用語である。尚、Agent properties が Patient properties を上回った場合に指定される -o (not object) とは GB に於ける外項、及び RG に於ける initial subject に該当する LFG の用語である。

⁴ Dowty (1988) の内容を洗練、発展させた Dowty (1991) ではそれぞれ Contributing properties for the Agent Proto-Role 及び Contributing properties for the Patient Proto-Role である。本稿では基本的に Dowty (1991) の内容に則って議論を行う。

⁵ Dowty (1991) では場所移動と状態変化を包括して change of state として設定したが、本稿では混乱を避ける為に意味について述べる際はこの二つを区別して議論を行う。

independent of action of verb, or may not exist at all.

以上が Agent Proto-Role 及び Patient Proto-Role の概要であるが、これに対し Ackerman & Moore (1999)ではフィンランド語やチェコ語、エストニア語に於いて動詞の telicity が文法的に実現することを根拠に、Patient Proto-Role として TELIC ENTITY を加えるべきだとする議論を行った。

本稿では基本的に Zaenen (1993)の基準を基本的に踏襲した上で Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY を採用して議論の前提とする。そして Diedrichsen (2002)などの議論に於いて「例外」として設定せざるを得ない begegnen (s)「出会う」などの、二つの参与者同士の接近・衝突による相互作用を伴う動詞群を「衝突・遭遇の動詞」と呼称し、これらが sein を完了助動詞に選択する原理を明らかにする為に議論を行う。また Sorace (2000)で観察された、結果を明示する移動動詞や状態変化動詞がそうでない移動動詞や状態変化動詞に比べ英語の be に当たる完了助動詞を選択し易い傾向は TELIC ENTITY を用いることで合理的に説明することが可能となることも示していく。

3. 衝突と遭遇の動詞の概要

前節でも言及した通り、本稿では sein を完了助動詞選択に選択する場合のある動詞群の一つとして、多くの先行研究で言及されてきた場所移動動詞、状態変化動詞（及び Diedrichsen 2002 では出現・消失動詞）の他に、「衝突・遭遇の動詞」を想定すべきであると考え。「衝突・遭遇の動詞」とは二つの参与者同士の接近・衝突による相互作用を伴う動詞群を指し、ドイツ語では prallen (h,s)「衝突する」や stoßen (h,s)「ぶつかる、突く」、treffen (h,s)「出会う」、kollidieren (h,s)「衝突する」などの例がある。以下はこれらの動詞が sein を完了助動詞に選択する例である。

(7) a. Rita {*hat/ ist} mit dem Kopf gegen
 Rita.NOM {*have.PRS/ be.PRS} with the.DAT head.DAT towards
 die Glasscheibe geprallt.
 the.ACC glass_plate.ACC hit.PP

リタは頭をガラス板にぶつけた。

b. Der Ball {*hat/ ist} an den Pfosten geprallt.
 the.NOM ball.NOM {*have/ be.PRS} on the.ACC post.ACC hit.PP

ボールが柱に当たった。

(8) a. Ich {*habe/ bin} an den Stuhl gestoßen.
 I.NOM {*have.PRS/ be.PRS} on the.ACC chair.ACC bump.PP

私は机にぶつかった。

b. Ich {*habe/ bin} mit dem Kopf an den

- I.NOM {*have.PRS/ be.PRS} with the.DAT head.DAT on the.ACC
 Schrank gestoßen.
 cupboard.ACC bump.PP
 私は頭を棚にぶつけた。
- (9) Am Bahnhof {*habe/ bin} ich auf
 at.the.DAT station.DAT {*have.PRS/ be.PRS} I.NOM on
 meine Freundin getroffen.
 my.ACC girl_friend.ACC meet.PP
 駅で私は恋人に（偶然）出会った。
- (10) Zwei Flugzeuge {*haben /sind} in der Luft
 two airplanes.NOM {*have.PRS/ be.PRS} in the.DAT sky.DAT
 miteinander kollidiert.
 with.each.other collide.PP
 二機の飛行機が空中で互いに衝突した。

以上に挙げた様に、基本的に「衝突・遭遇の動詞」に於いて助動詞が sein を取るのは、衝突や遭遇の対象を前置詞句ないしそれに準ずる副詞（例の中ではの miteinander「互いに」）で表わし、且つ対格目的語を取らない場合に限られる。遭遇の対象、または衝突を起こす参与者自身や身体部位が再帰代名詞を含む対格目的語で表わされる場合には以下の様に haben を完了助動詞に取る。

- (11) a. Ich {habe/*bin} mich am Stuhl gestoßen.
 I.NOM {have.PRS/*be.PRS} myself.ACC on.the.DAT chair.DAT bump.PP
 私は机にぶつかった。
- b. Ich {habe/*bin} mir den Kopf am
 I.NOM {have.PRS/*be.PRS} myself.DAT the.ACC head.ACC on.the.DAT
 Schrank gestoßen.
 cupboard.DAT bump.PP
 私は頭を棚にぶつけた。
- (12) Am Bahnhof {habe/*bin} ich meine
 at.the.DAT station.DAT {have.PRS/*be.PRS} I.NOM my.ACC
 Freundin getroffen.
 girl_friend.ACC meet.PP
 駅で私は恋人に会った。

まず注意すべき点として、前置詞 an 「～に」は(8)に於いて対格の名詞句を支配するのに対し、対格目的語を取る(11)では与格の名詞句を支配していることが挙げられる。更には(8)ではどこに衝突したか (a では「机」、b では「棚」) が強調されるのに対し、(11)では衝突を起こした主体ないし部位 (a では「私自身」、b では「頭」) が強調される⁶という意味的な差異が存在する。また遭遇の対象を前置詞句で取る(9)では「出会い」は必ず偶然のものであるのに対し、遭遇の対象を対格目的語で取る(12)では「出会い」は偶然のもでも、予め待ち合わせをした上での意図的なものであっても構わない⁷という意味の違いも存在する。これらの違いが何を意味するかについては次節で論じることとする。

但し、以上の様な動詞とは異なり、衝突の対象を与格目的語で取りながら完了助動詞に sein を選択する begegnen (s) 「出会う」などの例を挙げることが出来るが、これについても次節にて詳しく論じる。

また特に衝突の動詞に於いて特徴的なのが、衝突を起こす参与者としての主語が質量のない、或いは著しく質量の小さいもの、ないし概念的な事物である場合に、対格目的語を伴わず、且つ衝突の対象が前置詞句で表わされている場合であっても haben を完了助動詞に選択する傾向が強くなる例が存在することである。

- (13) Die Sonne {hat/*ist} aufs Pflaster geprallt.⁸
 the.NOM sunlight.NOM {have.PRS/*be.PRS} on.the.ACC road.ACC hit.PP
 太陽光が舗道に激しく照り付けた。
- (14) Die beiden Veranstaltungen {haben /*sind} miteinander kollidiert.
 the.NOM both.NOM events.NOM {have.PRS/*be.PRS} with.each.other collide.PP
 両方の行事の日取りが被ってしまった。

以上が「衝突・遭遇の動詞」の諸特徴であるが、こうした「衝突・遭遇の動詞」を本稿に於いて移動動詞や状態変化とは別に論じるのは、そもそも「衝突・遭遇の動詞」が場所移動や状態変化を顕在的には表わさないことに加え、衝突や遭遇といった事態の参与者が主語や目的語ないし前置詞句の一部のどれにも現れる余地が存在し、また主語の性質によって助動詞選択の傾向が変わる場合があることが理由である。以下では「衝突・遭遇の動詞」に於いて TELIC ENTITY が実現する根拠について、これらを詳しく論じる過程で明らかにする。

4. 衝突・遭遇の動詞と TELIC ENTITY

結論から述べれば、「衝突・遭遇の動詞」は Fillmore (1970) や Tsunoda (1981) など論じられて

⁶ 2016年7月17日ケビン・ベルガーさんよりご指摘頂いた。

⁷ 2016年7月17日ケビン・ベルガーさんよりご指摘頂いた

⁸ 辞書に基づく作例であるが、ウィーン出身のインフォーマントのケビン・ベルガーさんによるとこの文は非文とのことなので、この用法の prallen には方言差による容認度の差が存在するようである。但し他に適切な類例が見付からなかったため、本稿ではこの文を議論の枠内に入れて論じることとする。

いるような surface-contact verbs 「表面接触動詞」の目的語が持つ意味役割を項に与えていると考える。つまり本稿の基準に則れば、「衝突・遭遇の動詞」が取る前置詞句を含む必須項のいずれかは Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY として実現するということになり、そして主語が TELIC ENTITY を担った場合に、sein を完了助動詞として選択する傾向が強くなると結論付けることになる。以下で簡単に TELIC ENTITY と「表面接触動詞」の概要を示す。

前述の通り、フィンランド語やチェコ語、エストニア語に於ける格の使い分け等の現象を説明する為、Ackerman & Moore (1999:6)では TELIC ENTITY という概念を以下の様に定義した。

- (15) An argument a_i of predicate P is a TELIC ENTITY iff P is a telic predicate and entails that a subpart of the denotation of the entity that corresponds to a_i (under any use of P), expresses the end-point of any telic event denoted by P and its arguments.

以下の英文(16)の目的語はどちらも incremental theme となっているが、定である(16b)のみ TELIC ENTITY となっている。この様に終結点の存在する事態を表現する項が TELIC ENTITY となる。

- (16) a. Kim drank *water*.
b. Kim drank *the water*.

また「表面接触動詞」とは英語の hit や kick などに当たる動詞であるが、角田(2014:77, 80)に基つけば意味的には以下の様に定義出来る。

- (17) 表面接触動詞：
相手に及び、かつ、相手に変化を起こすことを必ずしも含意しない動作を表わす動詞。

つまり、以上の定義に則って考えれば、「衝突・遭遇の動詞」は、状態変化を必ずしも伴わないが、いずれか(ないし双方)の参与者に何かしらの事態が起こる動詞であると考えることが出来る。尚、「遭遇の動詞」を「衝突の動詞」と並列に扱うのは、これらが二つの参与者同士の接近・接触に伴う telic な相互作用を生じさせる図式が共通する動詞群だからである(無論、細部に於いて異なる振る舞いをする可能性は排除しない)。以下ではこれら二つの動詞群の振る舞いについて検討する。

hit や kick などは行為の主体とその行為の対象という二者の参与者の役割がはっきり異なっているが、「衝突・遭遇の動詞」に関してはその衝突ないし遭遇という事態が意図されたものである場合も、どちらの参与者からも企図されていなかった場合も想定しうる。例えばドイツ語の treffen (h,s)「会う」では一意に意図的に会うという事態を表わす場合、以下の様に対格の再帰代名詞を目的語に取り、会う対象を前置詞句で表わす。

- (18) Am Bahnhof {habe/*bin} ich mich mit
 at.the.DAT station.DAT {have.PRS/*be.PRS} I.NOM myself.ACC with
 meiner Freundin getroffen.
 my.DAT girl_friend.ACC meet.PP
 駅で私は（約束した上で）恋人に会った。

(18)の例文の場合、主語の ich 「私は」は意図性を持つ行為の主体として実現し、対格の再帰代名詞 mich 「私自身を」は「出会い」という事態の対象、つまり TELIC ENTITY になっている。この様に「出会う」主体が意図性を持つ場合には、「出会い」という事態の同一の参加者の主体としての側面と客体としての側面が同時に実現するという構図になる。このことは「遭遇の動詞」の取る前置詞句を含む必須項が TELIC ENTITY になるという主張に合致する。

次に主語が指す参加者とは異なる「出会う」対象が対格目的語として実現する、以下の(19)の例文の様な場合であるが、前述の通りこの場合では出会うという行為は意図的であってもなくても良いということになる。これに対し、(20)の様に「出会う」対象が前置詞句で表わされる場合、「出会い」という事態は必ず偶然のもの、つまり非意図的なものになるという差異が存在する。

- (19) Am Bahnhof {habe/*bin} ich meine
 at.the.DAT station.DAT {have.PRS/*be.PRS} I.NOM my.ACC
 Freundin getroffen.
 girl_friend.ACC meet.PP
 駅で私は恋人に会った。

- (20) Am Bahnhof {*habe/ bin} ich auf
 at.the.DAT station.DAT {*have.PRS/ be.PRS} I.NOM on
 meine Freundin getroffen.
 my.ACC girl_friend.ACC meet.PP
 駅で私は恋人に（偶然）出会った。

(19)では対格目的語の「恋人」が TELIC ENTITY となっており、主語は TELIC ENTITY にはなっていない為に、意図的に「出会い」という事態を惹き起こした主体、ないし「出会い」を経験する主体として実現することが可能となる。これに対し、(20)では「出会う」対象の「恋人」が前置詞句として表わされ、ある種の着点の様な役割を担っていることで、主語が TELIC ENTITY として実現する形になっており、意図的な「出会い」の主体とはなっていない。主語が TELIC ENTITY として実現した(20)は結果として sein を完了助動詞に選択する傾向が強くなっていることが確認出来る。

衝突の動詞についても、衝突する参与者自身や身体部位などが対格目的語として実現する場合に *haben* を完了助動詞に選択し、前置詞を伴って実現する場合に *sein* を選択する傾向は変わらない。以下は *stoßen* (h,s) 「ぶつかる、突く」の例⁹である。

- (21) a. Ich {habe/*bin} mich am Stuhl gestoßen.
I.NOM {have.PRS/*be.PRS} myself.ACC on.the.DAT chair.DAT bump.PP
私は机にぶつかった。
- b. Ich {*habe/ bin} an den Stuhl gestoßen.
I.NOM {*have.PRS/ be.PRS} on the.ACC chair.ACC bump.PP
私は机にぶつかった。
- (22) a. Ich {habe/*bin} mir den Kopf am
I.NOM {have.PRS/*be.PRS} myself.DAT the.ACC head.ACC on.the.DAT
Schrank gestoßen.
cupboard.DAT bump.PP
私は頭を棚にぶつけた。
- b. Ich {*habe/ bin} mit dem Kopf an den
I.NOM {*have.PRS/ be.PRS} with the.DAT head.DAT on the.ACC
Schrank gestoßen.
cupboard.ACC bump.PP
私は頭を棚にぶつけた。

前述した様に、(21a)及び(22a)と(21b)及び(22b)の間には形式面及び意味的な側面に於いて差異が見られる。前置詞 *an* 「～に」は対格目的語を取る(21a)及び(22a)では与格の名詞句を支配するのに対し、(21b)及び(22b)では対格の名詞句を支配している。更には(21a)及び(22a)では衝突を起こした主体ないし部位 (21a では「私自身」、22a では「頭」) が強調されるのに対し、(21b)及び(22b)ではどこに衝突したか (21b では「机」、22b では「棚」) が強調されるという意味的な差異が存在する。一般にドイツ語に於いて前置詞 *an* が与格名詞句を支配する場合は場所を表わし、対格名詞句を支配する場合は方向を表わすとされており、また(21)と(22)の例では主語は意図的でないのが普通であるが、意図的であっても良いとされる。以上の事実から以下のことを推測することが出来る。

⁹ *stoßen* 「ぶつかる、突く」には以下の様に人やものとの(偶然の) 出会いを表現する用法がある。

- (i) Beatrix {*hat/ ist} auf ihre Freundin gestoßen.
Beatrix.NOM {*have.PRS/ be.PRS} on her.ACC friend.ACC meet.PP
ベアトリクスは友人と遭遇した。
以上のことから、衝突と遭遇を同じ枠組みで扱うことに合理性を見出すことが出来る。

(21a)及び(22a)ではそれぞれ対格目的語である「私自身」及び「頭」が TELIC ENTITY となっており、an「～に」の前置詞句は支配される名詞句が与格となっていることから分かる通り、単なる衝突の起こる位置として機能しており、主語は衝突を経験する主体、ないし意図的に衝突を惹き起こす行為の主体である。TELIC ENTITY となっている対格目的語の「私自身」や「頭」は当然意味的にも強調されることになる。これに対し、(21b)及び(22b)では an「～に」は対格名詞句を支配していることから、この場合着点として機能する「机」や「棚」が TELIC ENTITY となっており、これらとぶつかる主語である「私」も衝突の反作用、ないしフィードバックを受けて TELIC ENTITY となり、結果として sein を完了助動詞に選択する傾向が強くなる。そして TELIC ENTITY となる「机」や「棚」が(21a)や(22a)に比べて意味的に強調される結果となる。尚、本稿では(21b)及び(22b)の主語を TELIC ENTITY たらしめているのは前置詞句の作用であるとするが、構文による作用と考えても帰結としては同じことになる。また(21b)及び(22b)に於ける衝突が意図的なものであっても完了助動詞に sein を選択することから、Zaenen (1993)を踏襲したアプローチが必ずしも上手くいっていない結果となっているが、これについては今後の研究の課題とする。

以上で衝突ないし遭遇する対象や参与者自身ないし身体部位が対格目的語ないし前置詞句の一部として実現する例を見たが、これとは異なり衝突の対象が与格目的語として実現する例や、目的語としては現れない以下の様な例も存在する。

- (23) Ernst {*hat/ ist} ihr unterwegs begegnet.
 Ernst.NOM {*have.PRS/be.PRS} her.DAT halfway meet.PP
 エルンストは彼女に途中で出会った。
- (24) Wir {*haben/ sind} an der Ecke zusammengeprallt.
 we.NOM {*have.PRS/ be.PRS} on the.DAT corner.DAT together.hit.PP
 私達は角のところでぶつかった。

(23)の例では衝突の対象が与格目的語として実現し、(24)では主語がそのまま衝突の対象として表れているが、どちらも完了助動詞に sein を選択している。これについては、begegnen(s)「出会う」が語源的に前置詞 gegen「～に対して」が接頭辞 be-によって動詞に派生した¹⁰ものであり、分離動詞である zusammenprallen(s)「衝突する」が副詞由来の前綴り zusammen「共に」を伴っていることから推察される通り、動詞が主語に衝突の対象としての役割を与える構造を取っていることにより、主語が TELIC ENTITY となり、結果的に完了助動詞として sein を選択するという構図になっていると考えられる。

尚、begegnen(s)「出会う」に関しては、以下の様に意味的に telic ではなく、また主語が意図的である用法であっても完了助動詞に sein を選択する例外的な存在するが、この現象の原理に

¹⁰ 2015年8月23日渡邊明先生よりご指摘を頂いた。

関しても今後の研究の課題とする。

- (25) Ernst {*/hat/ist} ihr freundlich begegnet.
 Ernst.NOM {*/have.PRS/ be.PRS} her.DAT friendly meet.PP
 エルンストは彼女に親切に対応した。

最後に、対格目的語を取らず、且つ衝突の対象（と思われるもの）が前置詞句の一部に現れる場合であっても完了助動詞に haben を選択する例について解説を行う。以下に示す様に、prallen (h, s) 「ぶつかる」及び kollidieren (h, s) 「衝突する」の例では、具体的かつある程度以上の質量を有する主語を取る(26a)及び(27a)の例では sein を完了助動詞に取るのに対し、質量のない「光」や抽象的な概念（この場合「日取り」）を主語に取る(26b)及び(27b)では完了助動詞に haben を選択している。

- (26) a. Der Ball {*/hat/ist} an den Pfosten geprallt.
 the.NOM ball.NOM {*/have.PRS/ be.PRS} on the.ACC post.ACC hit.PP
 ボールが柱に当たった。
- b. Die Sonne {hat/*ist} aufs Pflaster geprallt.
 the.NOM sunlight.NOM {have.PRS/*be.PRS} on.the.ACC road.ACC hit.PP
 太陽光が舗道に激しく照り付けた。
- (27) a. Zwei Flugzeuge {*/haben /sind} in der Luft
 two airplanes.NOM {*/have.PRS/ be.PRS} in the.DAT sky.DAT
 miteinander kollidiert.
 with.each.other collide.PP
 二機の飛行機が空中で互いに衝突した。
- b. Die beiden Veranstaltungen {haben /*sind} miteinander kollidiert.
 the.NOM both.NOM events.NOM {have.PRS/*be.PRS} with.each.other collide.PP
 両方の行事の日取りが被ってしまった。

これについては、以下の様に考えることが出来る。(26a)及び(27a)では対格の名詞句「柱」を支配する前置詞 an 「〜に」を含む前置詞句や、前置詞 mit 「〜と共に」を内部に含む miteinander 「互いに」が、衝突の反作用を意識させ易い主語の「ボール」や「飛行機」を TELIC ENTITY たるしめることで、完了助動詞に sein を選択する傾向が強まる。これに対し、主語が「太陽光」や「日取り」といったものである(26b)や(27b)では、これらが衝突の反作用ないしフィードバックを意識させ難いものである為に、対格の名詞句「舗道」を支配する前置詞 auf 「〜の上に」や miteinander 「〜と共に」が主語を TELIC ENTITY にする作用を起さないと考えることが出来る。

る。但し、これを明示的に確かめる明確な形式的ないし意味的な差異は一見したところでは見当たらない為に、これを別の手段で確かめることも依然必要な課題として残されている。また「太陽光」に関しては causer としての役割を主語が持っていることで、より haben を選択する傾向が強まっている¹¹ことも考えられる。他の質量の低い自然物として、「風」が衝突を起こす場合も以下の(28)の例文の様に同様に haben を完了助動詞に選択することが確認出来る。

- (28) Der Wind {hat/*ist} auf uns zugeweht.
 the.NOM wind.NOM {have.PRS/*be.PRS} on us.ACC blow.PP
 風が私達に吹きつけた。

尚、以下の(29)の様な移動動詞の例文で確認出来る様に、質量のない「光」が完了助動詞に sein を選択しないという訳では勿論なく、主語の「衝突を意識させるか」という側面は「衝突の動詞」に於いてのみ顕現するものである。

- (29) Die Sonne {*hat/ ist} durch die Wolken
 the.NOM sunlight.NOM {*have.PRS/ be.PRS} through the.ACC clouds.ACC
 gedrungen.
 penetrate.PP
 太陽光が雲を通して差し込んだ。

以上の観察から、「衝突・遭遇の動詞」は場所移動動詞及び状態変化動詞とは区別すべきものであり、また質量の有無が関わる様な特殊な性質からも明らかな通り、助動詞として sein を選択させている因子は場所移動動詞や状態変化動詞とも異なっていると結論付けられる。本稿ではこれを Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY であると考える。

5. 場所移動動詞及び状態変化動詞における TELIC ENTITY

最後に、場所移動動詞や状態変化動詞に於いて、主語が TELIC ENTITY として実現する場合に完了助動詞に sein を選択し易くなることを確認し、TELIC ENTITY を採用する一貫した合理性が存在することを確認する。Sorace (2000)では助動詞選択階層、つまり通言語的に英語の have ないし be に当たる完了助動詞を選択しやすい自動詞の意味的性質の階層を提案したが、その議論に於いて、より典型的に be を選択する自動詞として、移動の結果を明示する場所移動動詞、及び非連続的な変化を来す状態変化動詞を挙げた。ドイツ語に於いても特に状態変化動詞に於いてはこの傾向が顕著に見られ、例えば以下の例の様に、連続的な状態変化を表わす altern (h,s)「歳を取る」よりも非連続的な状態変化を表わす sterben (s)「死ぬ」の方がより sein を完了

¹¹ 2015年12月5日渡邊明先生よりご指摘を頂いた。

助動詞に選択する傾向が強い。

- (30) Maria {?hat/ ist} gealtert.
 Maria.NOM {?have.PRS/ be.PRS} age.PP
 マリーアは歳を取った。
- (31) Hans {*hat/ ist} heute in jungen Jahren gestorben.
 Hans.NOM {*have.PRS/ be.PRS} today in young.DAT years.DAT die.PP
 本日ハンスが若くして死んだ。

また吉田 (1999)などが指摘している通り、移動の結果を明示しない場所移動動詞は、前置詞句によって着点ないし経路の明示を行うことで、sein を完了助動詞に選択する傾向がより強化されることが観察されている。

- (32) a. Wir {haben/ sind} den ganzen Abend geschwommen.
 we.NOM {have.PRS/ be.PRS} the.ACC total.ACC evening.ACC swim.PP
 私たちは一晩中泳いだ。
- b. Wir {*haben/ sind} ans andere Ufer geschwommen.
 we.NOM {*have.PRS /be.PRS} on.the.ACC other.ACC shore.ACC swim.PP
 私たちは向こう岸に泳いで行った。

但し、吉田 (1999)でも指摘されている通り、現代ドイツ語では(32a)の例に於いても sein を完了助動詞に選択する傾向が強まっており、また南ドイツ方言では着点を明示しない移動動詞でも一貫して sein を選択することが知られている。ただいずれにせよ、移動の結果を明示する移動動詞の方がより sein を完了助動詞に選択する傾向が存在することは確かであるように思われる。

以上の傾向は TELIC ENTITY の概念を用いることで合理的に説明することが出来る。即ち、atelic な事態を表わす(30)や(32a)では主語が TELIC ENTITY にならないのに対し、telic な事態を表わす(31)や(32b)では主語が TELIC ENTITY となる為に、より sein を完了助動詞に選択する傾向が強まることになるのである。この様に、完了助動詞選択に於けるより一般的な現象に於いても TELIC ENTITY の概念を用いる有効性が存在することから、TELIC ENTITY を完了助動詞選択の議論に用いることの合理性が担保されることになった。

6. 結論

以上の議論から、Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY の概念を導入し、「衝突・遭遇の動詞」を場所移動動詞や状態変化動詞とは性質の異なるものとして論じ、それらの

動詞群が完了助動詞に *sein* を選択する原理を説明する有効性が示された。また TELIC ENTITY という概念は、場所移動動詞や状態変化動詞の完了助動詞選択の傾向について説明する際も有効なものであることから、この概念を用いることの一貫性を確認することが出来た。今後の研究の展望としては、「衝突・遭遇の動詞」以外の「例外的な」動詞群についても一貫した説明を行い、また今回合理的な説明をすることが出来なかった不可解な例外的現象が起こる原理について解明を行うことが求められる。

略号

ACC 対格 DAT 与格 NOM 主格 PP 過去分詞 PRS 現在 PST 過去

引用文献

- Ackerman, Farrell and Moore, John (1999) 'Telic Entity' as a Proto-Property of Lexical Predicates. *Proceedings of the LFG99 Conference*, CSLI Publications, Stanford University
- Diedrichsen, Elke (2002) Zu einer semantischen Klassifikation der intransitiven haben- und sein Verben im Deutschen. Graham Katz, Sabine Reinhard, and Philip Reuter, (ed.), *Sinn und Bedeutung* 6, 37-52, University of Osnabrück
- Dowty, David (1988) Thematic Proto-Roles, Subject Selection, and Lexical Semantic Defaults, unpublished paper OSU, Ohio; published in a revised version as:
- Dowty, David (1991) Proto-roles and Argument selection. *Language* 67, 547-619
- Grewendorf, Günther (1989) *Ergativity in German*. Dordrecht: Foris Publications
- Kaufmann, Ingrid (1995) O- and D-predicates: a semantic approach to the unaccusative- unergative distinction. *Journal of Semantics*, 12, 377-427
- Sorace, Antonella (2000) Gradients in auxiliary selection with intransitive verbs. *Language* 76, 859-890
- Sorace, Antonella (2003) Gradient auxiliary selection and impersonal passivization in German: An experimental investigation. *Journal of Linguistics* 391(1), 57-108
- Tsunoda, Tasaku (1981) Split Case-Marking Patterns in Verb-Types and Tense/Aspect/Mood. *Linguistics* 19, 389-438.
- Zaenen, Annie (1993) Unaccusativity in Dutch: Intergrating Syntax and Lexical Semantics. In James Pustejovsky (ed.), *Semantics and the Lexicon*. Dordrecht: Kluwer. 129-161
- 角田大作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版
- 吉田光演 (1999) 「動詞の項構造と完了助動詞 *sein/haben* の交替について」『広島ドイツ文学』13, 29-44

The Auxiliary Selection with “bumping” Verbs in German

Shungo Fujii

s.fujii0404@gmail.com

Keywords: German, Auxiliary Selection, Theta-role, TELIC ENTITY

Abstract

As is the case in most of the Germanic languages, German has what is known as variance in auxiliary selection with *haben* (have) and *sein* (be) for perfect formation. Although this phenomenon has long been investigated, there are still “exceptional verbs” left to be accounted for (e.g. copula verbs, “bumping” verbs, and “staying” verbs). Adopting as the key to this phenomenon the notion of TELIC ENTITY proposed by Ackerman & Moore (1999), this paper attempts to find out why some “bumping” verbs behave the way they do.

(ふじい・しゅんご)